

SY9-3

多職種による発達障害支援 ～全国調査で見えた連携のコツ～

市河 茂樹

安房地域医療センター小児科

発達障害診療では多職種の連携が欠かせません。しかし、実際に他の職種と話すとうまく意思疎通できなかった、あるいは不満を感じた、ときには板挟みになって辛い思いをした…、そんな経験はありませんか？子どものための専門職同士が、なぜ円滑に連携できないのか—この問題について、これまで全国規模の調査は行われていませんでした。

今回、小児医療委員会では全国初となる「医療と教育の連携」をテーマに調査を行いました。一次調査として日本小児科学会会員を対象にwebアンケートを行い、1253人の回答を得ました。詳細な二次調査では、330人から具体的な取り組みを教えてくださいました。本調査により、全国各地に熱意あふれる連携が行われ、その背景には臨床医の暗黙知と呼ぶべき連携のコツ、医療—教育のみならずあらゆる多職種連携で重要な要素があること示された一方、個人の努力では乗り越えられない様々な困難も存在していることが分かりました。

委員会では膨大な現場の声を1. 連携の現状、2. 連携するときに知っておくべき教育現場の状況、3. 連携の課題と対策、4. 具体的な連携例、5. 小児科学会への要望にまとめ、日本小児科学会雑誌上に公表しました(委員会報告：「地域における教育分野との連携」web調査. 日児誌 2022; 126: 140-145.)。

武川は多職種連携を「単発で一方的な連携」から「絶えず情報が交換される統合的な状態」まで4つの段階に分類し、連携を深化させる必要性を説いています。連携を深化させるコツは何か？発達障害支援における多職種連携に必要なものは何か？

当日は、委員会調査と文献的考察に基づいて、発達障害の子どものためになる多職種連携を考えます。幅広い職種からの参加をお待ちしています。